

会 有 為 米 沢
創 立 1 3 0 周 年

我妻榮記念館と米沢有為会

我妻榮記念館館長 矢尾板操

私は縁を頂き2017年6月に「我妻榮記念館」の館長を拝命した。それから1年半程時が経ち、同記念館の運営に携わる中で我妻榮先生に関する歴史を学ぶ機会を得た。今回は我妻榮記念館の歴史や現状について、ご紹介申し上げます。

1 開館の経緯

我妻榮記念館は、民法学者として文化勲章を受章された我妻榮先生の生家で、明治時代に建てられたものである。現在の住所は米沢市中央三丁目4番38号で、敷地約517・57㎡の上木造2階建(1階79・33㎡、2階12・39㎡)と土蔵(1階19・83㎡、2階も同左)がある。大正6年の米沢大火の時も生き残った。

我妻榮先生の父上は、当時米沢中学の英語教師をしており「じらいや」というあだ名がつく程の人気者で、榮先生はその子供なので「じらいっ子」とあだ名(自顧奨学金の由来だと思います)がついていた。大正6年の米沢大火の時「じらい様の家が危ない!」と生徒達が駆けつけ、勇猛果敢に火勢に包まれながら懸命の防火活動に努めた。一面が焼野原になったにもかかわらず「じらい様」の家だけは焼免れたのである。

その後、この建物は1927年、我妻家から大友家が買い受け、以来昭和の末期までの70年を経た時点で、市内の建設会社の手に移り、老朽建物でもあることから解体の運命にさしかかっていた。そうし



現在の我妻榮記念館(米沢市中央三丁目)



道路に面して目立つ看板

た情報が漏れ伝わると、市内有志の間に、我妻榮先生の偉業顕彰のためにもその生家を保存、継承したいという強い願いが自然に湧き上がったのである。



我妻榮記念館内部

平成元年、米沢市制施行と米沢有為会創設が共に百年という節目に際し、米沢有為会の本部東京では、1千万円を募金して奨学金の充実と東京興譲館の宮修繕を主とした記念事業を計画していた。

この事業の募金目標額は4千万円、内訳は土地建物の取得費3千万円、建物の修復費等1千万円、合計4千万円であった。

その時、米沢有為会米沢支部から我妻榮先生の生家を取得・保存する事業も本部計画の事業に組み入れてほしいという要望が提案された。このことを受けた本部では、取得にかかわる募金活動一切を米沢支部中心に進めることを条件に、この提案を承認した。

高橋幸翁米沢有為会米沢支部長の思いは厚く、平成3年の前半までの約2年間で、目標額達成の見通しがついた。結果的には法人69件で約2千万円、個人286件で約6百万円、残り1千2百万円は米沢市からの補助金となった。

2 現在の運営状況

①開館日 毎週 日月木金の13時から16時まで 入場料無料
②来館者数等 例えば平成29年度は、来館者見学者数444名、施設利用者米沢有為会、先人顕彰会、置賜民族学会、鉄砲屋町町内会等)488名であった。地域別の来館者の上位(②)は、米沢(27)、東京(23)、米沢除く山形(7)、宮城(7)、埼玉(6)である。なお、一部先人顕彰会の事務局に貸している。

③財政状況(平成29年度の場合) (収入の部) 米沢市からの補助金160万円、米沢有為会の負担金65万円、雑収入20万円 収入合計245万円



蔵の中に保管されている判例カード

④収蔵品 著作367冊、著作雑誌原稿44点、公聴会・講義・講演原稿208点、会議ノート資料42点、判例カード6952枚、民法歴史年表2巻(いわゆる巻物と言われているもの)、手帳4冊、辞令26件、感謝状4枚、手紙・はがき35件、写真226枚、講演テープ・DVD7件、色紙・掛軸6点、その他25点(東大法学部長の机椅子含む)

米沢有為会は、東京、米沢、仙台に支部がある。米沢が発生源の公益社団法人であるから大きな支部(支部長は中川市長)ではあるが、組織上は一支部である。私は地政学的に「我妻榮記念館」は米沢支部のテリトリーの中にあるから、物事を最初に相談するのは米沢支部だと思っている。

⑤運営スタッフ(敬称略 順不同) ・名誉館長 我妻榮、顧問 上村勘二・館長 矢尾板操 ・管理人 塚正・運営委員 安部敏 五十嵐京子、高橋節子、本多和彦 佐藤繁、神保厚、山田隆弘

米沢有為会は、東京、米沢、仙台に支部がある。米沢が発生源の公益社団法人であるから大きな支部(支部長は中川市長)ではあるが、組織上は一支部である。私は地政学的に「我妻榮記念館」は米沢支部のテリトリーの中にあるから、物事を最初に相談するのは米沢支部だと思っている。

と米沢有為会側の協議の場が正式に生まれたということである。もう一つは、平成30年6月に、一人のアメリカ人が訪ねてきた。ハーバード大学のライシシャワー日本研究所の研究員コリン・ジョー・ズ氏(33歳)で、「我妻榮先生」を研究して本を書くというのだ。本人の言によれば「日本法学における社会思想をテーマに...」我妻先生と「近代法における債権の優越的地位」に重点を置く章がある。それに関連して、1920年代における我妻先生の思想の形成や、債権に対する彼の考えがどうなっているか、などについてよく理解したい。それに東大法学部内での日々の状態といった、より幅広い問題にも関心をもっている。貴館を利用していただけようだったら、以上の事柄に集中したい」ということで、米沢に2日間滞在して資料調査をして帰国された。日本人にも、このような研究者はいままでにいなかった。



献杯会場に集まった方々

「三宝寺」へ出かけた。よく手入れされた立派なお寺である。我妻榮先生のお墓を探し、土庫さん持参の掃除用具で皆で清掃する。その後竹田さん持参のお花を供え、お線香を焚き順次お参りする。最後に記念写真を撮影した。あいにく逆光でいい写真を撮れなかった。ようやく我妻先生のお墓に参拝できた満足感に浸り帰路にいった。途中で、茶坊珈路という素敵なお店で一休み、そこで我妻先生の偉大さを語り合う。夕方、献杯会場である粋酔に到着する。専修大学法学部の高橋寿一教授、弁護士の外岡潤氏も到着して献杯後食が始まる。

3 我妻榮先生とは

米沢での一般的な理解は、文化勲章受章者で、かつ米沢市名誉市民、つまり偉い人・法律の神様という認識ではなからうか。今回は私が感じていた、一つのことに絞って書いてみたい。我妻榮先生は一生を研究に捧げると決意した時、以下の目標を立てた。



我妻榮先生の墓の前で

お墓参りを加しないかと誘われた。もちろんである。平成30年10月21日15時に西武池袋線の石神井公園駅前というのが、待ち合わ

「民法講義」の連作は、その前者であり、「資本主義の発達に伴う私法の変遷」という研究テーマはその後者である。後者に属する『近代における債権の優越的地位』は不朽の名論文と言われている。我妻榮先生のお通夜の席での東畑精一氏のお話を紹介してみよう。お悔やみを申す席に田中二郎

4 我妻榮先生のお墓参り

我妻榮先生の命日は10月21日である。昭和48年に亡くなられているので45回目の命日ということになる。そんな時期に東京の方から、



筆者略歴

矢野板操(やのいたみさお)昭和25年米沢市生まれ。山形県立米沢興譲館高校、福島大学経済学部卒業。昭和47年、三菱銀行(現、三菱UFJ銀行)入行。平成10年、同行退職。米沢信用金庫入行。同19年、同行退職。同20年、福島大学大学院経済学研究科入学。平成22年、同研究科卒業。同年、福島大学共生システム理工学研究科博士後期課程入学。上智大学神学学部科目等履修生。現在に至る。現在、山形交通圏タクシードライバー。公益社団法人米沢有為会我妻榮記念館館長。